広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 新約聖書ギリシア語の冠詞の用法について(修士論文)<修士論文及び卒論要旨> |
| Author(s) | 竹島, 俊之 |
| Citation | 広大言語 , 6 : 78 - 83 |
| Issue Date | 1966-12-10 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046257 |
| Right | |
| Relation | |

翌日の彼の赤銅色の体には
昨夜ころんだ時の名誉の負傷が痛々しく
姿をとどめていた。……

## 【修士論文及び卒論要旨】

# 新約聖書ギリシア語の冠詞の用法について（修士論文）

竹　島　稔　之

### I　はじめに

新約聖書，就中マタイ伝，ルカ伝を選んだ理由。冠詞を取り扱った理由。

### II　序　　論

Meillet, Schwyzerの冠詞論を中心として，冠詞発生の起源，アッティカ時代のその主たる用法。その使用に於ける問題点を取り挙げた。

### III　本　　論

才一章〜才五章は名詞を固有，唯一物，抽象，普通，自然物に分類し，それらの個々の場合に於ける用法を調べて見た。

才一章　固有名詞と冠詞

§ 1. 人名に関しては前方照応的冠詞を取るものと取らない場合がある。人種を表わす名詞は常に冠詞が用いられる。〔註「常に冠詞が用いられる場合」とはギリシア語冠詞の最も重要な機能の一つである前方照応の冠詞でない場合。即ち「以前にそのものが述べられていない場合」でも冠詞が使用される事を言う。〕地名ではGalilaía, Samaría等，行政区画上の地名は常に冠詞が用いられる。しかしHierosólma, Bēthanía 等町名，村名を表わすものは常に無冠詞であり，前方照応的冠詞も使用されない。

§ 2. 固有名詞と同格表現

常にMariám hē Magdalēnē の型が用いられる。即ち修飾する側の固有名詞は有冠詞であるが，修飾される側のそれは無冠詞である。これは①出身地，②身分，地位，称号，③家系系譜，④分詞によりその人の行為，性格が描写される場合の全てに当て嵌る。

§ 3. adnominal Genitivと冠詞

§ 1.で取り出された分類，即ち独立的使用〔註，如何なる形容詞，分詞，属格名詞によっても修

飾されない場合。〕に於いて冠詞を取るか取らないかによる名詞の分類はここでもそのまま当て嵌る。即ちtò sōma tou Iesou, parà tén thálassan tēs Galilaías の如く独立的使用に於いて冠詞を取る名前は，ここに於ても冠詞が現われる。一方gēi sodómōnの如く無冠詞であったものはここでも無冠詞である。なお修飾する側の固有名詞の冠詞の有無により，修飾される側の名詞の冠詞の有無も左右される。この現象は固有名詞以外の名詞にも当て嵌る。rgl. 才七章。

才二章　唯一物と冠詞

§ 1. haidēs<冥府>, géenna<地獄>, parádeisos<天国>に関してはルカ伝，マタイ伝の間に差が見出される。kósmos はそれが表は意味の違いにより，即ち<人間世界>，<全世界としてのWelt>等により冠詞使用が左右される。ouranos では冠詞の使用は揺れている。これは sēmeion ek tou ouranou M16;semeion eks ouranou L 11$_{17}$等マタイ伝，ルカ伝の同種表現の比較から窺われる。尚Mt では複数形式が比較的自由に用いられているが，LK では限られている。hē Basileía ton ouranōnがMに31例見出されるがLk では皆無であり，それを表わすに hē Basíleia tōu theou が用いられている等の微妙な用法上の差が，LK. Mt. の間に見出される。（尚ouranósの大体の傾向としては無冠詞である。）

§ 2. diabolos, satanは常に冠詞が用いられる。kuríosに関して無冠詞形は「the Lord」を示し，冠詞が使われる場合は奴隷に対する「主人」を示す。この違いはadnominal Genitivに於て特にはっきりと現われる。

§ 3. hieros<イエルサレムに在る神社>, naos<神殿>, korbanās<神殿の宝庫>, thusiastērion<神殿の祭壇>, gazophulakeion, bēmaは常に冠詞が用いられる。例外は無い。

§ 4. sunédrion<ユダヤ人の最高評議会>, sunagōgē<ユダヤ人の会堂>, ekklēsía<教会> も常に冠詞が用いられる。後二者は各都市にあるもので唯一物ではない。更に文脈により特定の会堂，教会を常に指しているとは限らない。それが彼等の信仰生活に関係する故に冠詞が用いられる（vgl. 抽象名詞の項。gráphē, entolē等），或は建築物，建造物を表わす語は冠詞を用いる傾向が強い故とも考えられる。（vgl. 普通名詞，oikos等の項）

才三章　抽象名詞

大部分の抽象名詞が形態により分類されるので，その個々の場合に就て冠詞が如何に現われるかかを調べる。(1)-sis zB. analēmpsis, (2)-iaで終る語 zB. agōnia。(3)-moで終る語zB. apartismos。(4)形容詞から抽象名詞を作る場合。zB. eleēmosúnē,

apostasion (5)「時」に関係する語。zB. aiōn, hēmera, hōra —この場合と，次の(6)に就ては意味を基準として分類。(6)「方位」 zB. anatolē (7)−osに終る語。(8)−ēに終る語。(9)−maに終る語。

抽象・具象の区別のはっきりしない名詞は(7)・(8)・(9)に現われる。(1)・(2)・(3)更に(7)・(8)・(9)のうちはっきり抽象名詞と判断でき名詞に於ては次の場合に冠詞が用いられる。①対比的使用の場合。zB. euruxōros hē hodos hē apagousa eis tēn apōleian…… tethlimmené hē hodos hē apagousa eis tēn zōēn M7$_{13}$ <滅びに通ずる道は広い……命に通ず道は細くて通り難い>②nomos, entolē, graphē, anomía等彼等の信仰生活に関係する語。③形式的表現（常に同じ文章で用いられる場合）ekei estai ho klauthmos kai ho brugmos tōn odontōn. M13$_{42.50}$etc.

以上の条件が無い場合は全て無冠詞となり，hamartía<罪>の例の如く前方照応的に使われている場合でも無冠詞である。

(6)漠然とした方角を表わす場合は無冠詞。

(5)hēmera<日>に於て分類した冠詞使用の基準が，この頃の他の語全てに当て嵌まる。

(7)logos<言葉>, rēma<言>, parabolē<譬え>に就ては前方照応的に使用されている時，或はそれが一定の内容を示す時に冠詞が現われる。

(7)・(8)・(9)のうち容易に物質的・具体的なものが予想される語では前方照応的な冠詞が現われる。

## 才四章　普通名詞

schwycer, Wackernagal, Blass−Debrunner, Mayserの冠詞論から判断するならば総称的表現に於ては冠詞は使われる場合もあるし，使われない場合もある事になる。そこでこの章では前者と後者の間には何か差が見出されないか，更には「総称」とは何かを探る事を中心問題として論を進めて行った。先ず文章をparabolē <譬え>の文とそれ以外の普通の文章の二種に分ける。前者はhai alōpekeslphō eous exousin kai ta peteina tou ouranou kataskēnōseis L 9$_{58}$<狐には穴があり，空の鳥には巣がある>の如く比喩表現に近いものであり，それ故に一般的事柄を表わすものであり，従ってそこで使われるhai alōpekes, ta peteina tou ouranouは当然一般的なそれに就て述べられたものであり，具体的事物を指示するものではないと考えられる。即ちそれらの語は大部分総称の表現と考えられる。次にこれらの文章に使われている名詞を「前に既に言及されているか否か」即ち前方照応物があるか否かにより I〜IVの四型に分類し考察する。これは前に

も述べた如くギリシア語の冠詞では前方照応の機能が非常に強い故に，もし上述の分類を無視するならば，それと総称的冠詞使用の区別が付かなくなる恐れがあるからである。この分類表のうちⅠ「前方照応物が無くて無冠詞」は総称が導入語。Ⅳ「前方照応物が無くて有冠詞」は総称か，文脈により唯一物となる場合と考えられる。便宜上，名詞を「動物」，「植物」，「道具」等に分けて考察したがそれらの間には当然の事ながら差は余り見出されず，そして総称的用法は以下に述べる条件が無い場合は無冠詞で使われる事が多い事が判明した。冠詞が使用される時は，「対比的」という条件が見出される。

前方照応的使用即ちⅡ型は非常に正確に行なわれている。しかしdōma<屋上>，thura<戸>，oikia<家>，mnēma<墓>，ploios<舟>etc．建築物，建造物を表わす名詞は前方照応が無い場合でも，又文脈によりそれらが特定の家，舟等を表わさない場合でも冠詞が用いられている。

第五章　自然物・自然現象を表わす名詞

自然物は上述の建築，建造物と同様，前方照応が無い場合でも冠詞が用いられる事が多い。例えばgē<地>，erēmos<荒野>，hodos<道>，oros<山>等。これらの語が使われている文章に於て大部分は「文脈より判断して特定の山，荒野を指示している」と考えられない場合である。

自然現象を表わす語は個々のものにより冠詞の使用は異なっている。即ちbroxē<俄雨>，anemos<風>，nephelē<雲>等は冠詞が用いられるが，plēmura<大洪水>，phanasma<幽霊>，kuma<大波>は無冠詞。kataklusmos<大洪水>は常にノアのそれを指し，唯一物である。故に冠詞が用いられていると考えられる。phōs は本格的な光を指す時は冠詞が用いられるが，「精神的な光」を指示する時は無冠詞である。

第六章　形容詞と冠詞

ここでは帰属的形容詞のみを扱い，名詞化の場合は取り挙げていない。冠詞の現われ方により次の三型を考える。Ⅰ ho agathos anthrōpos. Ⅱ ho anthrōpos ho agathos. Ⅲ anthrōpos ho agathos. このうち他のコイネーでは頻繁に用いられていたⅢ型は聖書では殆んどその例が見出されず僅かにルカ伝の会話文に一例見出されるのみである。Ⅱ型はMayserの研究によれば，B.C.2～1になると殆んど使われなくなった型である。聖書でもその使用は形式的な特殊な表現に限られている。〔註，但し{分詞 / 前置詞句}が叙述的にある人，ある物の行為，性質を描写する場合はこの型が圧倒的に多く，この事は形容詞の場合にのみ当て嵌まる。〕 zB. ho huios nou ho agaphētos.

I型と無冠詞形agathos anthrōpos を比較すると次の場合に冠詞が用いられている事が解る。

①対比的ho agathos anthrōpos ek tou agathou ekballei agatha.

②独立的使用の場合に常に冠詞が用いられる語に於いて。 zB. hautē estin hē megalē kai prōtē entolē.

以上の条件が無い場合は無冠詞となる。

前方照応的に冠詞が用いられる時は強調的，対比的である。 zB. to de kalon sperma M13 37b —An 24 kalon spermaの如く。普通はeis askous palaious M9 17a—kai hoi askoi apolluntai 9 17o. klamude kokinēn M27 28 <緋色の外套>—tēn klamuda 27 31 のように形容詞を落して前方照応の冠詞を取る手法が多く取られている。

更に，上述した如くoros, gē 等，独立的使用の場合に常に冠詞を取っている語でも（vgl. 自然物を表わす名詞），形容詞が修飾する時は無冠詞となる。

pāsに関しては抽象名詞では無冠詞，具象名詞では有冠詞の傾向が見られる。

才七章　adnominal Genitivに於ける冠詞

Adnominal Genitivは二つ或はそれ以上の名詞概念の種々の関係を表わすのであるが Mayser は次のような分類をしている。a）所有的属格，b）分配的属格，c）主語的属格，d）目的語的属格，e）Genitivus Relations f）性質を表わす属格，g）材料を表わす属格，h）創始者，原因を示す属格。しかしこれらの分類からは冠詞使用上の差は現われなく，他の要因，即ち名詞が抽象名詞であるか否か，所有代名詞が付加されているか否かにより左右されているように思われる。更に固有名詞の章で触れた如く，この表現形式には同化現象が作用していると考えられる。 z.B. krima thanatou に対して to plētos tēs perixōrou.

以上の事を考慮して次のような分類を考えた。I抽象名詞＋抽象名詞，II抽＋具，III具＋抽，IV具＋具。そして各項目毎に才一名詞，才二名詞の冠詞の有無により次の四型を考えた。

| | 才一名詞 | | 才二名詞 | |
|---|---|---|---|---|
| | 冠詞 | 無冠詞 | 冠詞 | 無冠詞 |
| 1 | ○ | | ○ | |
| 2 | ○ | | | ○ |
| 3 | | ○ | ○ | |
| 4 | | ○ | | ○ |

そして次の如き結果が得られた。Ⅰ型では1例を除いて全て4。Ⅱ型では1と4が用いられているが，1の形式を取るのは次の場合である。才一名詞がanastasisの如く独立的使用の場合も常に冠詞を取る名詞。或は才二名詞が，tou huion tou anthrōpou, tou patros mou, tōn patérōn humōn の如くadnominal用法以外でも冠詞の名詞に対する密着度が強い場合。例えば，ho huios tou anthrōpou <人の子>はマタイ伝に24例，ルカ伝に23例見出されるが無冠詞形式即ちhuios anthrōpou 或はho huios anthrōpou は皆無である。

これらの条件が無い時は4となる。

Ⅲ型でもto haima tēs diathékēs to peri pollōn の如く才一名詞の冠詞の密着度が強い場合は1であるがそれ以外は全て4となる。

Ⅳ型では大部分が1即ち両方共冠詞が用いられる傾向が強い。但しその属格が「素材・内容」の概念を表わす時4が殆んど例外なく用いられる。

以上の事より抽象名詞はここでは自身，無冠詞となるのみならず，それが修飾する名詞も無冠詞とする。即ち同化現象の働きが明瞭に感じられる。逆に具象名詞は今迄述べて来たような冠詞をとる条件，例えば唯一物，前方照応，対比的使用等の条件がない場合でも冠詞を取る傾向が強いと言える。

（文責　本人）

# 国語審議会の諸問題

関　谷　孝　英

○ ね ら い

言葉は国民だれもが関わる重要な対象であり，さらにいえば文化の源泉たりえるものである。このテーマの追求により，国民のためのことばの方向を，提示する。

○ 論文の構成

Ⅰ　国語審議会の歴史

審議会の特に戦後にやりとげた仕事（成果）を羅列。

Ⅱ　国字論争の一般的動向

漢字，仮名の起源から，現在にいたる国字論争の概観をみる。

Ⅲ　対立点の諸問題